

それから、

平成24年 1月22日

原町中央産婦人科 医院

院長 高橋 亨 平

I 'LL BE BACK といって12月2日に福島医大消化器外科に入院、6日に手術の予定であった。しかし、現実はそのなにあまいものではなかった。ICG検査にて肝臓の予備能力測定では、厳しく19であり、5日に肝シンチCTにてても厳しく、手術は出来ず延期となった。6日、血管が抗がん剤治療で、殆ど使用出来なくなったため、ポートを埋め込み頸部静脈から心臓に向けて管を埋め込んだ。そして別な抗がん剤治療を開始し、7日、8、9日と3日間かけて治療し、12月9日に退院した。

2週間に1回の抗がん剤治療を厳しく行う予定であったが、12月22日、2回目の治療は白血球が1400しかなく中止、G-CSFの注射をし、12月28日に再度チャレンジした。しかし、今度は、血小板が6万と少なく中止となった。結局12月は1回しか治療は出来なかった。

そんな状態の私を知ってか、亀田総合病院の産科、NICU科、部長の鈴木真先生が、12月30日、31日の2日に亘って（本人いわく、じっとしていらなかった。押しかけ？）当直に来てくれ、1件の分娩介助をしてくれた。あの暑かった、8月7日に、妊婦の家の除染作業を提案協力してくれた仲間であり、勇敢な医者であり、戦友でもあった。たまらなく嬉しく、心から、感謝している。

年賀状は、長い自分の人生の中で一度も欠かしたことはなかったが、初めて書かなかった。この事では、いつもお世話になっている皆様には、失礼極まりなく、心からお詫び申し上げます。

平成24年1月4日、今度こそと思い、何とか合格し、抗がん剤の点滴を4時間かけて終了、一部の抗がん剤は、帰りに簡易ポンプを首からぶら下げて帰り、5日、6日とその状態で診療を行った。

2週間に1回の治療、予定だが、副作用との戦いで、不合格で月に1回しか治療できないこともあり、落ち込むことが多くなった。こんな日々の繰り返しだが、体育館で検死した多くの人達の無念さを思いだすと、胸がつまり、自分にはまだ命が残っているということに、感謝しなければといつも思っている。

2週間後の1月16日当院での血液検査では、白血球1800、血小板10・

1であり19日なら出来ると思い、17日 G-CSF75 μ g \times 2A、18日、1A と万全を期し19日、大学の診療を受けたが「すか」はずれだった。血小板が微妙に足りなく、次週の方が安全とのことであった。残念だが、これもありかと帰ってきた。

途中、飯館の役場付近で除染作業をしていたので、少し見学していた。国のプロジェクトらしいが、ものすごい温度差を感じた。いでたち、機械類は凄いのだが、なにをしたらいいのか分からない人達がたくさんいた。除染は素人であることは一目で分かった。一部きちんとしているところもあったが、むらがあるな、大雑把だな、というのが直感であった。

次に、老人ホームにも寄って見た。昔、当院で育った看護師に逢うためだ。0.3 μ SV に合わせてある線量計が、ギャーピー、ギャーピーなる。1.2 μ SV 位だが、うるさいだろうから、玄関からは止めようと思っていた。しかし、入る前にぴたっと止った。そんなにいいのと思い、玄関で見てみたら、0.18 μ SV であった。1階平屋なのに鉄筋コンクリート造りであった。こんないい環境なら、入所者は動かないほうが安全だ。南相馬市の失敗と比べると犠牲者は殆ど出ないし、賢明な策であったと思う。

来週はイタリアの放送局が来るらしい。26日が血液の所見を見て治療する日だ、今度こそ治療できるかも知れない。